

〔書評〕

John H. Sailhamer, "Genesis",  
*The Expositor's Bible Commentary*

Vol. 2, F. E. Gaebelin. (General Editor) Grand Rapids: Zondervan, 1990.

西 満

最近、福音派の出版社が出している主要な注解書のシリーズの創世記の注解書が相次いで出版された。第1は、Gordon J. Wenham, *Genesis 1-15, Word Biblical Commentary*, (Word Pub. 1987) 352pp. で、著者は英国の The College of St. Paul and Mary の宗教学の教授で、最近その活躍が特に注目されている旧約学者である。第2は、Victor P. Hamilton, *The Book of Genesis Chapters 1-17, The New International Commentary on the Old Testament*, (Eerdmans, 1990), 522pp. で、著者は、米国のアズベリ一大学の宗教学の教授である。上記の書はそれぞれ1-15、1-17章までの注解であり、続編は近々刊行の予定である。両者共序論においてそれぞれの解釈の神学的姿勢をかなりのスペースを用いて明確に記している。第3は、John H. Sailhamer, "Genesis", *The Expositor's Bible Commentary*, Vol. 2 (Zondervan, 1990), 284pp. で、著者は、米国のトリニティ神学校の旧約学助教授である。本評においては特に第3のセイルハマーの「創世記」について論じることになっているが、第1と第2の著者についても少しばかり紹介してみたい。

ゴードン・ウェンナムは、自分の著書が、

ヴェスターマンとギブセンの注解書、およびその他多くの創世記に関する論文に負っていることを記しつつ、創世記がその後の出エジプト記―申命記に記された出エジプトと、シナイにおける律法授与の出来事の背景になる歴史を記しているのであるとする。そして、1-11章の記事でさえこういった視点で読む必要がある。アブラハムを召した神は、単なる一地方神ではなく、全宇宙の創造主なる神であることを教え、アブラハム以前の一連の人類の受けた悲劇的出来事は、アブラハムひいてはイスラエルの選びの必要性を示していると記す。著作年代についてウェンナムは、最近の学説を紹介、批判しつつ結論として前1250年から950年の間であるとする。1章の創造の日の解釈については、ウェンナムは枠組説に近い立場を採る。ウェンナムの議論の展開は明快で分かりやすい。福音主義の立場に立ちながらも、最近の学説に十分注意を払いつつ、自己の学説を展開している。

ハミルトンもまた、最近の批評学の展開を詳述しつつ、創世記が統一性を持った書である立場を保持している。彼は、2:4以降が10 (11) の תולדות の定形語によって結ばれており、それによって創世記が文学的

にも、神学的にも統一性を持った作品であることが分かるという。なお、ハミルトンは、2:4aの חִלְוֹת が1:1-2:3に属するという現代の多くの聖書の区分(RSV, JB, NEB, NAB, Speiser)に対して懐疑的である。その第1の理由は、2:4aは、2:4-4:26の序論の役割を果たしているのであり、第2の理由はマソラ本文の段落区分は2:4の統一性を支持しており、古代訳(70人訳)も同様である。この点については、ウェンナムもハミルトンと同様の区分をする。ハミルトンはモーセの著作性を一方的に主張することだけが福音派に託された役割ではないとする。ポスト・モザイカの加筆の可能性をも認める必要がある。ハミルトンもまた、創造の日の解釈について粹組説に対して好意的である。ハミルトンの注解書の一つの大きな特色は、当該箇所が新約聖書の中でどのように用いられているかを解説しながら記していることである。

ジョン・セイルハマーは、1983年以降トリニティ神学校で旧約学とセム語の助教授として教えており、米国の福音主義に立つ神学校の中で、中心的存在の一つであるトリニティ神学校の人気教授の一人でもある。しかし、この創世記の注解の内容は従来の解釈とは随分と異なったものがある。それで、前述したように、本項においては主に本書について少し論じてみたい。

本書は、頁数からいえば284頁で上記2冊の注解書と較べるとずっとコンパクトである。こういった紙数上の制約からか、本書の序論には批評学に関する記述は殆ど見られない。セイルハマーはまず、創世記の著者は、五書全体がそうであるように、伝

統的なモーセ著作説を受け入れる。同時に、五書自体は無記名で記され、そのように読まれるべきであることをも記す。さらに、創世記は五書の一部であるがゆえに、創世記が書かれた目的も五書が記された目的の中で論じられる。

まずセイルハマーは五書の構造を次のように分析する。五書を形作っている基本的な文学形式が四つある。それらは、物語、詩、律法、系図である。その中で、彼は特に物語と詩の結びつきに注目する。創世記1, 2章の創造の記事の後にアダムの短い詩的談話が記され(2:23)、その後にエビローグがくる。同じことが、堕落の物語の後(3:14-19)、カインの物語の後(4:23-24)、ヨセフの物語の後(48:15-16, 20)についても言える。

五書全体について見るならば、三つの重要な区切り点を見ることができる。(1)族長物語の後に49:1-27そしてエビローグ。(2)出エジプトと荒野の物語の後にそれぞれ出15章と民23-24章の詩文。(3)創世記から申命記までの五書の物語の後に申32-33のモーセの歌、そしてエビローグ(34)。

上記三つの箇所(出15章を除く)には、次のような言葉が記されている。「集まりなさい。私は終わりの日に、あなたがたに起こることを告げよう」(創49)。「私は、この民が後の日にあなたの民に行なおうとしていることをあなたのために申し上げましょう」(民24:14)。「あなたがたの部族の長老たちと、つかさたちとをみな、私のもとに集めなさい。私はこれらのことばを彼らに聞こえるように語りたい……私の死後、あなたがたがきつと堕落して、私が命じた

道から離れること、また、後に日に、わざわざあなたがたに降りかかることを私が知っているからだ」(申31:28-29)。これら三つの章句にはいくつか共通している語がある。それらは「集まりなさい」「語りたい」「後の日に」である。特に、「後の日に」「終わりの日に」(בְּאַחֲרִית הַיָּמִים)という語にセイルハマーは注目する。「後の日に」は五書ではその他では申4:30だけに用いられている。これらの継ぎ目の語は、著者または編集者の解釈が表されている。五書の著書は過去の出来事に強い興味を示しているだけでなく、「終わりの日に」を繰り返し用いることによって、未来に対しても強い関心を示している。著者の中心的関心の一つは、過去と未来とは本質的に結び付いているということであり、さらに、五書および創世記の小さな単元の物語の中に未来を示す型があるとも言う。一例を挙げると、創12:10-20のアブラハムのエジプト訪問の記事と創41-出12章のイスラエルのエジプト滞在の記事の間に類似点があり、前者は後者を予表している。(カースト、*創世記注解* 12章参照)。特に注目すべきは、創12:10-13:4に記されているロトの立場は、創41-出12章の物語の中に記されている「入り混じって来た外国人」(עַרְבֵּי 出12:38)と重ね合さっていることである。と同時に創19:36-38において、ロトはモアブとアモン人の先祖になっている。そして申23:3では、彼らの主の集会に加わることが禁止されている。このように、ロトはアブラハムの集会から最終的に除外され、読者は、エーレブ (עֶרְבָב) が、イスラエルの集会に入っていないということを知らさ

れるのである。この解釈に従ってネヘミヤは外国人との結婚問題を処理したのである。以上のように、セイルハマーは五書の構造を終末論的な面と、タイポロジカルな面から分析する。

さらにセイルハマーは、五書を次のように分析し評価する。まず、創1:1-2:4aを一つのまとまった歴史的叙述の単元とみなし、これが五書全体の序論であるとみなす。五書に記された最も顕著な出来事は何かということ、それはシナイ契約である。シナイ契約の意味は次の五つの点に要約することができる。(1)神はイスラエルと共に住まれる。(2)イスラエルは選民である。(3)神はイスラエルに土地を与えられた。(4)イスラエルは神の御旨に従わなければならない。(5)救いか裁きかは、イスラエルの服従、不服従にかかっている。

しかし、五書の著者がシナイ契約に関して記した意図は次のように要約することができる。(1)神はイスラエルの民とシナイ契約を結ぶことによって、アブラハムの子孫を通して人類に祝福をもたらそうとした。(2)人類に祝福を与えようとしたシナイ契約はイスラエルの民の不従順のゆえに失敗した。(3)祝福を回復するという神の約束は究極的には成就する。それは神がイスラエルに信頼と服従の心を与えるからである。従って、五書はシナイ契約の失敗を回顧し、未来の約束の成就を展望する終末的思想をもった書である。

では、五書の序論的役割を果たしている創1:1-2:4aは何をその中心的課題としているか。セイルハマーによれば、それは神、人、地 (land) である。1:1において著者

は「初めに、神が天と地を創造した」ことを記す。そして2節から著者の焦点は地へ向けられる。そして2節以後の地はシナイ契約との関係で見る地である。従って ארץ は「land」と訳したほうが意味が近い（出19:5参照。この場合『全世界』は ארץ־הארץ で all the land, 一般には earth が用いられている）。では、1:1-2:4a は地の何について語っているのか。それは神が地の所有者であると主張しているのである。「わたしは……地と、地の面にいる人間と獣を造った。それで、わたしの見る目にかなった者に、この地を与えるのだ」（エレ27:5）。五書の著者は、全地の所有者である創造主なる神によって、イスラエルに土地の授与が約束されたことは——シナイ契約によって効力が発生した——全く合法的なことであることを指摘しているのである。

1:1-2:4a がシナイ契約への序論であるという見解に立つ時、創世記1章は、契約の神に関する極めて重要な思想を提示していることに気がつくのである。それは宇宙の創造主なる神である。イスラエルは契約という方法を通して神を知ったため、神はイスラエルのみの神という考えに傾く危険がある。それに対して、創世記1章は神は全世界の創造主であり、全人類を祝福される方であることを明瞭に述べているのである。

以上が、J. セイルハマーが「Genesis」の序論で述べている創世記の構造と神学の概要である。

本書はユニークな創世記の注解書である。特に、五書、創世記の構造を、物語と詩との結び付きを創世記—五書の構造の分析をなす手掛かりとする手法には、斬新なものがあ

る。五書全体を三つの区分に分けるメルクマールに「終わりに日に」（באחרית הימים）の用語を用いる方法も、五書を読むにあたって新しい観点を与えられて興味深い。しかし、その解釈が正しいかどうかについては、今少し時間をかけて考えてみる必要がある。

創1:2以降に記されている「地」が、シナイ契約との関係で見るローカルな土地を意味しているというセイルハマーの見解は、少し行き過ぎた面があるのではないだろうか。また、シナイ契約が失敗であるとモーセが考えていたのであれば、なぜモーセは申命記の中で繰り返しイスラエルの人々におきてと定めに従うことを勧め、そうすれば約束の地においてしあわせを得ると説いたのか理解できなくなる。

評者は、1991年夏、トリニティ神学校の夏期講座に出席し、セイルハマー博士の二つのクラスの講義を聞く機会を得た。クラスで聞くセイルハマー先生の講義は魅力に富んだものであり、多くの示唆を与えられた。その教えは福音主義に立ち、モーセ著作説を擁護しながらも本書に記されていることよりもずっとラディカルなものがあった。そのため、学生たちはしばしば当惑した。しかし、このような講義が、福音主義陣営の中心的神学校においてなされることに、米国の福音主義の幅の広さを痛感させられた。但し、その学説の評価は、本書の評価とあいまって暫くの時が必要であるのかもしれない。なお、セイルハマーの五書に関するさらに詳しい見解は、1992年出版予定の *Pentateuch as Narrative*（仮称）に詳しく記されていると聞く。

なお、評者は、同じ夏、英国のチェルト

ナムのゴードン・ウェンナム教授のお宅に招かれ、短い時間ではあったが、親しく教えを頂く機会にも恵まれたことを付記して

おく。本評は、紙数の関係で、主に序論に記された創世記を理解する基本的立場の紹介にとどめた。〔旧約学 専攻〕

## Book Review

### *Awakening to Mission: The Philippine Catholic Church (1965–1981),*

by Pasquale T. Giordano (Quezon City: New Day Publishers, 1988) xv, 376pages.

Reviewed by Thomas N. Wisley, Ph. D

#### INTRODUCTION

An evangelical might conclude from the title that *Awakening to Mission* is about Protestant missionary work among Roman Catholics in the Philippines. In actual fact, the book is written by a Jesuit missionary who has lived in the Philippines more than 25 years. Rev. Pasquale T. Giordano is professor of Religious Studies at the Ateneo de Davao University and associate editor of *Tambara*, the university journal. As a Roman Catholic scholar he brings an “in-house” perspective to Roman Catholic missions in the Philippines.

But why write a book review about Roman Catholic missions from a Roman Catholic perspective for an evangelical journal? I suggest two reasons.

First, approximately 86% of Filipino people claim to be Roman Catholic in their religious orientation. This being the case it seems important that the religious

background of the majority of people be considered.

Second, I think an “insider” perspective on this religious orientation can be helpful to non-Catholics, particularly evangelicals. It has been too easy in the past for evangelicals, as well as those from other theological persuasions, to speak for what others believe.

For example, I picked up a book in which the author discussed animistic religious practices in Roman Catholic Christianity in the Philippines. This description may or may not be true depending upon which Catholics one is talking about and depending upon what one means by “animism.” Undoubtedly there is a reality here and one cannot escape the accommodation of Roman Catholics to the phenomenal world in their missiology. But to equate without qualification the animism of the New Testament times, or the animism of Africa or West Irian to the Philippines is inaccurate. Also,